

人権作文コンテスト 入賞作品



『平和のためにわたしができること』

加茂小学校3年 中井 真里さん



わたしは夏休みに終戦のテレビ番組を見ました。少しでもその時代のことを知りた
いなと思って、この本を読みました。

この話は、時計屋さんの前で一人で泣いていたおばあちゃんが、実は、せきねす
九才。子どものすずの体をさがしながらいつしよに歩く、みくとゆきな。本当は、お
ばあちゃんは、にんちしようでした。心と体が入れかわったのではなく、自分のこと
がわからなくなっていたのです。

わたしが一番いしようにのこった場面は、二つあります。一つは、池のそばの、
三人の女の子たちの像の近くで「むかし、戦争のときに、このへんにいっぱいばくだ
んが落とされたんだって」とみくが言った時に、すずが「戦争…ばくだん」とつぶ
やいて、右つでのやけどのあとがいたくなつた場面です。みくは「戦争の話をしたから
体が思い出したのかもしれない」と言いました。いろいろなことをわすれるびようき
のにんちしようになつても、昔のことはおぼえているんだなと思いました。悲しくて、
つらくて、くるしかつたから、心にのこつていて、よくおぼえていたのだと思います。
すずは、子どもの時代に戦争があつて、楽しいことよりも、悲しいことが記おくに残つ
ていると思います。わたしは、そんなすずの子ども時代を痛ましく思いました。すず
は、うでにやけどを負つただけではなく心にも大きなきずがのこつていると思いまし
た。戦争が終わつて七十九年たつても、まだ苦しんでいる人がいることがわかりまし
た。兵士だけではなく、子どもたちもまきこまれることになりまし。戦争はともおそろ
しいことがわかりました。

二つ目は、すずが「あたし、いろんな人のひとりになる」と言つたことです。それは、
戦争が終わつて、「だれが、町をこんなにきれいにしたの？」とすずが聞いて、みくと
ゆきな「いろんな人」と答えたあとのことです。すずの「いろんな人のひとりになる！」



『ぼくの弟』

多田小学校5年 柴田 剛汰さん



ぼくの弟は、今二年生ですが、いつしよに多田小学校
に通つていません。ダウン症というしようがいあつて、
まだ話せないし、赤ちゃんみたいです。せも百センチし
かりません。カリヨンの丘特別支援ん学校というところ
に、スクールバスに乗つて通つています。言葉はまだ
話せませんが、ぼくに、「ニコニコ笑つてくれます。ぼく
がいつしよやないと夜はねないので、ねるまで横にい
てあげています。とつてもかわいいけれど、おこると引つ
かいてくるのがとつてもいいので、そこはいいやです。



もし、いつしよの多田小学校に通つていたらどうなるのかなつて考えることがあり
ます。二年生と同じ勉強は出来ないし、かいだんとか遊具とかきけんなところもた
くさんあつて、多田小学校に通うのは、すくむずかしいなと思います。

どんな風にすれば、多田小学校に行けるのかも考えてみました。まずトイレ。家の
トイレは長い時間すわるとおしりが落つこちるので、トイレのときは、赤ちゃん用の
べんごを付けてあげます。だから、学校のトイレもべんごを用意しないといけないです。
休み時間もかいだんとかあぶないので、だれかおとなの人が付いていないといけな
いと思います。外ではフラフラ歩くので、登下校はお母さんがひつようです。じゅぎ
よは別の内容をやらなといけないと思います。

こつやつて考えると、弟がたのしく安全に通うのはすく大変なのかもしれませ
ん。ぼくはやっぱり別々の学校でいいと思うのですが、こつて差別なのかなあと思つた
りもします。動画でしようがいのある人もいつしよに通う「インクルーシブ」とい
う特集を見たけれど、その子は会話も理解できているし、同じじゅぎよを聞けていた
ので、弟とはちがつと思ひました。

弟のえんそくや運動会の写真を見ると、いつも先生が手をつないでくれています。
クラスの人数もすく少ないみたいです。トイレも小さいトイレがあるみたいです。
写真でも弟は、いつもたのしそつです。ぼくは、そのほつが安心できます。いつしよ
の学校にいるほつが、毎日しんばいで見にいつてしまつかもしれないです。やつぱり
特別支援ん学校に通うのは、弟がニコニコすくすためにも、家族が安心するためにも
大切なのかなと思います。いつか、「学校でこんなことがあつたよ。」とか、弟といつし
よに話せたらいいなあと思います。

今年度も多くの小・中学生の皆さんから、
ご応募いただきました。
その中から入賞されました3作品をご紹介します。

は、平和な町をつくる、いろんな人の中の、ひとりになる、という意味だとわかりました。
わたしも、この言葉にさん同します。今、日本では、戦争をしていなくて、平和です。
これからもきれいで平和な町であるために、わたしにもできることを、考えました。
まず、戦争について知ることです。今も世界では、戦争をしている国があります。なぜ、
戦争をしているのか知ることや、戦争をしている国の子どもたちがどんなにつらい思ひをしているのか知ることが、
大切です。ほかに、ボランティアをすることです。町の
そつじや、草むしりです。また、困つている人を見つけれ
ら、声をかけて助けたいです。

ひとりひとりみんながきよう力して、平和な町ができて
いくことです。わたしも小さな平和づくりにきよう力する
ことで、だんだん大きな平和につながつていくはずだと思
ひました。

「いつかの約束 1945」 山本悦子（岩崎書房）



『車椅子の子と遊んだ話』

明峰中学校3年 野村 萌音さん



愛知の中学校にいたころ、一人の女の子と仲良くなつた。その子は障がい者で足が
不自由だつたため、いつも車椅子に乗つていた。同じ部活ということもあつたり友達
がその子と仲が良かったというこもあつたが、その子とはすく仲良くなれた。と
いつてもクラスが違つので廊下で会つと手を振り合うくらい仲だつた。中学二年生
になり私とその子は同じクラスになつた。その時初めて知つたのだがその子は普段、

特別支援学級に行つていて学活や総合の時しかクラスには来なかつた。私のクラスに
来るとその子は、

「萌音ちゃん。萌音ちゃん。」

と言つて私の所にきてくれた。教室が狭いため車椅子からは下りて義足ではないけれ
ど足を支えるブーツのような物をつけて歩いてた。当然、それをつけていてもすく
に転倒してしましようだつたため、私はすく駆け寄つてた。するとその子は、と
ても嬉しそつな顔をして、

「萌音ちゃん、ありがとう。」

と言つ。そついう事が何度もあつたため、仲は以前より深まつていった。

三学期になりクラスの雰囲気も落ち着いてきた頃、テーマパークに遊びに行つたり、
高校見学に行つたりする校外学習のような事を先生が企画してくれた。その時その子
と同じグループになつた。私はまだ車椅子の人がこんなに苦労していると思つてもい
なかつた。

まず大変だつたのはエレベーター探し。少しの階段でも上ることはできないので、
遠回りをしてエレベーターに乗る。やつと見つけた！と思つても目の前で上がつてい
てしまつこもある。あと狭い通路も通れないので遠回りする。ひたすら歩いて別の
ルートに行つて遠回りして遠回り…。班長だつた私はマップをよく見て行ける道を探
した。正直とても疲れてんだかかもやもやした気持ちになつた。

数日後くらいにその子から一緒にイオンに行こつと誘われた。私はテーマパークで
大変だつたことを思ひ出し、もやもやした気持ちで当日を迎えた。

エレベーターの場所を探して地図を見て、目の前にエスカレーターがあるけど遠回
りして…と当日はすく大変だつた。だけれどその子はごめん
ねとかすみませんとかを全く言わなかつた。むしろありがとと
かすく感謝の気持ちを店員さんとか周りの大人に伝えていた。

帰つてきて今日大変だつたと親に言つと、

「今日あなたはすくいい体験をしたよ。車椅子の子と遊ぶ
なんて一生にあるかないかくらいの体験だよ。車椅子のことをた
くさん学べるいい機会だつたと思つよ。」

母の言葉にズキンと胸が痛くなつた。私はもつすく転校するん
だしもつと優しく接すれば良かった。自分が一番大変だとか苦労
してるとか思わなければ良かった。だつて一番大変なのは車椅子
に乗っている本人なのだから。

私は車椅子の子と、遊んだことていろんなことが学べた。感謝
の気持ちをちゃんと伝えること。そして障がいのある人には優し
く接すること。この気持ちを大切にして生活していこつと思つた。

